

自分史（SI様）

作成日：令和3年6月

昭和6年7月15日	福島県福島市に生まれる
昭和12年	母「田〇千代〇」心不全で死去
昭和13年4月	福島市立第5小学校 入学
昭和15年	父が後母「キミ〇」と再婚
昭和20年4月	福島市立女子商業女学校 入学
昭和24年4月	郡山美容学校 入学
昭和28年	上京 鈴〇美容店（池袋要町）に就職 父「田〇利作」心筋梗塞で死去
昭和30年10月14日	伊〇吉〇と結婚
昭和32年	義母「ふ〇」が沖縄県より上京
昭和34年1月4日	長女「ふ〇」誕生
昭和38年4月4日	次女「好〇」誕生
昭和43年9月12日	次女「好〇」小児癌で死去
昭和45年3月7日	三女「恵〇」誕生
昭和59年9月4日	義母「ふ〇」老衰で死去（90歳）
平成6年10月7日	後母「キミ〇」老衰で死去（89歳）
平成13年9月21日	夫「吉〇」肺癌で死去（75歳）

私は父 田〇利作、母 千代〇の三女として昭和6年7月15日に福島県福島市の農家で生まれた。兄妹は9人、三女だった。三女と言っても、長男（利〇）、長女（久〇）、次女（照〇）、次男（正〇）、三男（好〇）、四男（康〇）の次の7番目の娘で、私の後には五男（常〇）、四女（美〇子）と続く。父の後妻の兄妹が六男（英〇）、七男（勲〇）、八男（重〇）と3人いたので、全員で12人兄弟だった。今では私より年長の兄弟は全員亡くなっている。

実家は百姓で米を作っていた。米の他にもじゃがいもやさつま芋、ほうれん草、人参なども作っていたがそれらは自分たちが食べるためのものだった。米を作るために人も雇っていたし、牛も飼っていた。牛は小学校6年生の時に死んでしまった。「危ないから牛には近づくな」と言われていたので、いつも一緒にはいなかったが死んだときは悲しかった。その牛が死んでからは機械を使うようになったのでもう牛はもう飼わなかった。兄達は農家の仕事を手伝っていたが、私はそんなに手伝わなかった。私は子供の頃から将棋が大好きだったので、農家の手伝いよりも将棋をやっていた。父や次男の正〇、弟の常〇とよく勝負した。常〇はとても強くて勝てなかったが、正〇には何度か買った。だが、正〇に勝つと「何で勝った！たまには負ける！」と怒られた。



※前列左から三番目が私



※長女（久〇）、次女（照〇）と上野駅にて

弟の常〇とは昔からとても気が合い、いつも一緒にいた。一緒にお風呂に入ったり、一緒に寝たり、楽しい思い出がたくさんある。妹の美〇子は1歳の時に飯坂温泉の下駄屋に養女に出た。とても良い暮らしをさせてもらっていて、綺麗な着物を着て、いつもお菓子をたくさん持っていて、本当に羨ましかった。

生みの母「千代〇」は私が6歳の時に心不全で突然亡くなった。44歳だった。とても悲しかった。そして、2年後に父の後妻として「キミ〇」が家に来て義母になった。義母はお針の先生をしていたので、牛小屋を改装して教室にしていた。義母は丙午の生まれでとても気の強い人だったが、私は「お母さん、お母さん」と慕ったので、かわいがってもらった。裁縫も教えてもらった。義母には、「人と話す時にはその人の目を見て話すんだよ」「挨拶がきちんとできる子になるんだよ」「人から物をもらったら必ずありがとうというんだよ」と何度も言われた。それが今でも身に沁みついているので義母が母として我が家に来てくれて本当に良かったと思っている。

義母には後に私の弟となる三人の子供ができるが、六男の英〇とは今でも仲が良い。とてもいい子で「ねえちゃん、ねえちゃん」と慕ってくれる。今も福島の実家とお墓を守ってくれていて、季節毎にリンゴや干し柿、お米などを送ってくれる。

小学校は福島市立第5小学校に通った。家からは歩いて30分くらいかかる少し遠い学校だった。私が小学生の時は東京の小学校、駒込小学校だったと思うが、そこから疎開の子供たちが来た。お寺に住んだり近くに家を借りたりして住んでいたが、地元の友達との遊びが中心であり交流はなかった。私たち福島の子供たちは兄妹も多かったのでお下がりばかりだったが、東京の子は綺麗な洋服を着ていたのを羨ましいと思った。

戦時中でも、家の近くで空襲の被害は無かった。防空壕は掘っていたが、屋根のない「ただの穴」だった。サイレンが鳴るとみんな一応防空壕に入るのだが、私は「ただの穴に入ってどんな意味があるのか」といつも不思議に思っていた。被害が無かったことは良いことなのだが、爆撃機は全て仙台に向かうので、爆弾は一つも落ちてこなかった。

戦争に負けた時の玉音放送は兄妹みんなで聞いた。被害もなかったので、私には戦争が終わったという実感は無かった。兄たちが泣いているのを覗き込んで兄に怒られたのを覚えている。

女学校は福島市立女子商業女学校に入学した。簿記や会計を学んだからか、今でも計算は大の得意だ。女子商業女学校卒業後は、郡山の郡山美容学校に入学した。次女の照〇が郡山で美容店を開業していたのと、父に「美容の職業は結婚した後も食いつぶれがないので良いぞ」と言われてこの道を選んだ。美容学校に2年通った後、照〇の店で3年働いた。もう一人前に髪も結えるようになっていた頃、店のお客さんに「腕を磨くなら東京がいい。私の娘が池袋近くの要町で美容店をやっているので行ってみたら？」と言われた。父に相談し、行く決心をした。福島発の夜10時の汽車に乗り、朝6時に上野に着いた。今なら新幹線ですぐだが昔は東京は遠かった。

そしてそのお客さんの娘さんのお店で働き始めたのだが、まったくお客さんの前には出

してもらえず、子守ばかりをやらされた。こんな扱いを受けるならもう美容師の世界は嫌だ
と思い、事務職を募集していた会社の面接に応募した。

その会社は目黒の月光町（今の目黒本町）にある沖〇電気興業(株)という会社で、蛍光灯
の中の安定器を作る会社だった。その日に面接に合格し、「明日から働いてもらっていいよ。
いや、今日、今からでもいいよ」と言われた。

近くに安いアパートを借り、直ぐに働き始めた。私は 2 階で安定器を作る仕事をしてい
た。お昼になると 1 階に降りていくのだが、その時に階段のところに必ずいるのが将来の
夫になる伊〇だった。沖〇電気興業(株)は伊〇と従妹が始めた会社だった。従妹が社長を務
めて、伊〇は資本金を出さなかったのが工場長という肩書だった。会社勤めの月日を重ねる
毎に伊〇と何となく話すようになり、逢引き、今でいうデートをするようになった。五反田
で映画を見たり、食事をしたり。会社の休みは 2 週間に一度しかなかったため、その休み
は全てデートに使った。五反田の帰りはいつも私のアパートまで送ってくれたが、伊〇は決
して部屋に入ることはなかった。

1 年くらい経って伊〇が「俺と一緒にならないか」と言い、私は「少し考えさせて」と言
うと「お金のことは心配するな。俺が持っているから大丈夫」と伊〇は言っていた。父親に
相談の手紙を出したら、「俺がその人となりを見てやるからまだ返事をするな」とのことだ
った。しばらくして父が上京してきて伊〇に会い、「良い青年じゃないか。お前にはもった
いないくらいだ。嫁にもらってもらえ」というので、「私で良ければいいわよ」と返事をし
た。伊〇は「いいんだよ。サ〇子でいいんだよ」と言った。その時初めて私のことを「サ〇
子」と呼んだ。私は「今までは田〇さんだったのに急にサ〇子だって」と内心驚いたが悪い
気はしなかった。

結婚式は西小山と武蔵小山の間にあった「八衆殿」という結婚式場で昭和 30 年 10 月
14 日に行った。夫は沖縄県の南大東島出身で、私は福島市出身、二人とも東京には親戚も
なく、仲人も立てなかったため、こじんまりとした式だった。



※夫とのハワイ旅行

結婚してからは夫が借りている部屋に住んだ。結婚してすぐに妊娠したので会社は直ぐに辞めた。ただ、子供は8か月で生まれる早産だったので直ぐに亡くなってしまった。

その後昭和34年1月4日に長女「正〇」が生まれた。当時住んでいたアパートは「子供は一人まで」という決まりだったので、引っ越しを検討していた。夫の母親「ふ〇」に相談したら、南大東島の土地や建物を全て売るのでその資金で東京に家を買って一緒に住もう、ということになった。当時、沖縄は米国領だったので、不動産の売却資金は全てドルだった。東京でドルを円に換えて今の目黒本町の家を購入して義母「ふ〇」との同居が始まった。

義母はとても頭が良い優しくいい人だった。同じひつじ齢で気が合った。私は母を早くに無くしているのだから結婚するなら母親が健在な人と結婚して自分の母親の様に接したいと子供の頃から思っていた。私は義母を本当の母親の様に慕ったし、彼女も本当の娘の様に大切にしてくれた。私と彼女はとても仲が良く、なぜか顔も似ていたのだから、近所の人には「本当の親子」だと思っていたと思う。

昭和38年4月4日には次女「好〇」が生まれた。しかし、5歳で小児癌を患い亡くなってしまった。「ぼんぼんがいたいよ、ぼんぼんがいたいよ」と言いながら亡くなった。とても悲しかった。

もう子供はいらない、と夫に言ったが、「もう一人だけ生んでくれ」と言われ、昭和45年3月7日に三女「恵〇」が生まれた。今は都立駒込病院で看護師をして偉くなっている。

義母は昭和59年9月4日に老衰で亡くなった。90歳だった。一度、蒲田の病院に入ったが嫌だと言って退院し、その後は私が自宅でおむつ交換から入浴まで全て手伝った。

義母キミ〇は平成6年10月7日に老衰で亡くなり、夫吉〇は平成13年9月21日に肺癌で亡くなった。75歳だった。

平成13年に夫が亡くなってから長女正〇と孫の直〇、理〇と一緒に住むようになった。直〇は昭和55年生まれの40歳、理〇は昭和58年生まれの36歳だ。それぞれ子供がいるので私には3人のひ孫がいる。ひ孫は本当にかわいい。子より孫が可愛いというが、孫よりひ孫が可愛い。何でもいうことを聞くとこころが可愛い。お正月にお年玉をあげるのは大変だが、「仏様にチーンってしてきたらあげるよ」と言うと「はい」と言いながら言われたとおりにする。可愛いものだ。

人生90年生きてきたが、こんなに長生きするとは思っていなかった。実の母が40代で亡くなっているのだから私も長生きはできないんじゃないか、と思ったこともあったが長生きできてよかった。

これからの人生はボケないで生きていきたい。100歳までは生きていたくない。せいぜいあと5、6年で良い。今も娘の世話にはなっているが、一人で着替えたりトイレに行ったりすることが出来なくなるなら死んだ方が良く思う。娘は悲しむかもしれないが迷惑をかける人生は嫌だ。デイサービスは私にとっては生きがいの場所になっている。私からデイサービスを取ったら何も残らない。将棋をしたり麻雀をしたり、友達とおしゃべりしたり、

デイサービスはとても楽しい。ここに来ないで家にずーっといたらなんてつまらない人生なんだろうと思う。

<趣味の話>

将棋は前述のように子供の頃からやっている。兄がやっているのを見ていた時、兄が銀を横に動かそうとしたので、「銀は横は駄目だよ、斜め後ろしか動かさないよ」と言ったら兄が、「何で知っているんだ。今度やるか」と言ってくれ、勝負をした。やってみたら想像以上に面白かった。こんな面白い遊びがあるのか、と思ったのを覚えている。将棋はその頃から機会があれば必ずやっている。一度目黒の町会旅行で山形県天童に行き、そこで将棋の駒を買ってきた。とてもいい駒で、指す時に「パチン」といい音がする。横浜に住んでいる弟の常〇が私の家に遊びに来た時にはその駒で勝負をするが、常〇には勝てない。何回やっても勝てない。強すぎる。

夫は将棋をしなかった。浪曲が趣味だった。よく「旅行けば～、駿河の園の茶の香り～」と唄っていたが何回も聞いているのでその度に内心では「あー、また始まったか、聞きたくないなあ」と思っていた。

麻雀も好きだ。麻雀はデイサービスに通い始めた十数年前にデイサービスで覚えた。将棋の方が好きだが、麻雀も楽しい。手積みは手先の運動になるから良いし、全自動は楽だから良い。

あとは計算が大好きだ。足し算、引き算も早いし、そろばんの暗算もできる生年月日から年齢と干支を計算するのも得意だ。デイサービスに行くと計算問題をくれ、全問正解で花丸をもらえるのでそれもとても嬉しい。

好きなタレントは里見浩太郎、好きな歌手は福田こうへい。里見浩太郎は明治座で実物も見たが惚れ惚れするカッコよさだ。福田こうへいは「南部蝉しぐれ」が好きだが、同じ東北（岩手県）出身なので親近感が沸く。

<若い人に伝えたいこと>

若い人には友人をたくさん作ることをお勧めする。友人がいると人生が楽しくなる。明るく元気に挨拶をし、自分のことを正直に話し、相手の話をよく聞く。そうすれば友人はできる。自分だけで考えるのではなく、人に話すと楽になれる。若い人には、「友人を作って楽しく生きなさい」と言いたい。